

## ICONE26 参加報告

2018/07/21~29

北原直人

### はじめに

私は 7 月 22 日から 26 日の期間にロンドンで開催された、原子力工学の国際会議 ICONE26 – 26th International Conference on Nuclear Engineering に発表者として参加した。また、参加するにあたって論文を執筆した。この論文が Qualified Student Award に選ばれたことで、学会の参加費や渡航費の補助を頂いた。学会中はポスターセッション、ツアーなど、いくつかのイベントに参加した。期間中の自身の経験を簡単に報告する。

### 事前準備

参加するにあたって事前に論文の執筆、ポスターの制作をした。アメリカに 2 週間の研修に行っていた時期に論文の締め切りがあり、出国前に終わらせれば良かったものの先延ばしにしたため、アメリカで夜中に作業するという事になってしまった。特に山本先生には多大なご迷惑をおかけした。言うまでもないが余裕を持った準備の重要性を痛感した。しかし喉元過ぎれば熱さを忘れるもので、発表準備とポスター制作もイギリスへ出発する直前になってしまった。

### ロンドンへ

新千歳空港からはタイのバンコク経由でロンドンのヒースロー空港へ向かった。新千歳からバンコクまではおよそ 6 時間のフライト、そこからトランジットでおよそ半日をスワンナプーム空港で過ごした。時間には十分余裕があったが、飛行機からタラップで降りた時に感じた蒸し暑さから、タイに入国して観光をする気は起きなかった。空港内のなんちゃって寿司屋で食事を済ませた後は、ひたすら暇を持って余す地獄の時間だった。当然寿司はおいしくない。深夜 0 時を回り眠気が忍び寄ってきたところに、ロンドン行きの便に搭乗した。ここからロンドンまではおよそ 12 時間である。アメリカに行った際に長期フライトの勝手を知ったとはいえ、長時間座っているのはやはり地獄の時間である。隣が空席だったのが幸いだった。現地時間で朝 8 時ごろにロンドンに降りてからは、特に困ることもなく宿泊先のホテルまで到着した。



ホテル近くの駅

## 学会

原子力工学の広い分野にまたがる学会であり、オープニングセレモニーやプレナリーセッションの参加者は多かったが、その後はセッションごとに参加者がかなりばらけている印象を受けた。QSA の義務としてセッションアシスタントの役割があったため(といっても出席は一切無かったが)炉物理の分野のセッションを聴講したが、特に初日という事もあり聴講者は発表者とその身内だけといった状況だった。



オープニングセレモニー会場

自身の発表は学会3日目だった。プレゼン自体は、しかし別段詰まることもなかったが、平々凡々といったところだったと思う。一方で、質問に対しては効果的な返答はほとんどできなかった。黙るよりはと、何度か聞き返したり、すぐには答えられないので後で答えるといった旨を伝えたが、苦肉の策と言わざるを得ず、発表者として強く反省する点である。当然全て英語で行われたが、これについては後述する。

学生の発表の質は、国に関わらずかなりばらつきがあるように感じた。つまり、話す文章をその場で考えているような間延びした発表など、かなり酷い発表もいくつか見受けられた。あるいは、スライドに文章をまるごと載せて、延々とそれを読み続ける発表者もいた。一方で、堂々と発表して質問の受け答えもしっかりしている発表は、(私の英語力の問題で)内容がよく分からなくても、優れているという印象を受けた。このことから、発表の技術は研究自体の優劣の印象を決める大きな要因である、という事を強く認識した。英語が堪能であれば、違った視点になるかもしれないが…。何にせよ、英語での受け答えがある程度できることは、前提として必要だと感じた。

学会最終日には technical tour に参加し、UKAEA の Culham Science Centre で核融合の研究施設を見学した。

## 観光

今回は学会前日の朝に到着して、最終日の翌日の夜に帰国であったため、十分に観光した。

驚くことに、入国してからロンドンに向かう中で、目に入る建物のほとんどが煉瓦・石づくりの古い趣のある建築物であった。ロンドン市内も同様に、一部地域を除くと近代的なビルはあまり見られず、古い建物が並ぶ。しかしそこには、景観保護といったような



市内の広場

形式的で無機質な印象は受けない。どこか自然な統一感を感じる景観は、古くから培われてきた基準となる美的感覚が、人々の意識の根底に息づいているためだろうか。ロンドン観光の定番らしいテムズ河沿いを歩いたとき、ロンドン橋やビッグベンといった名だたる建築物には目を見張るものがあったが、この街の魅力はむしろ、何気ない風景にあると感じる。堂々たる伝統を纏うこの街は、まさにこの街自体が娯楽であり教育であり芸術だ。美術館も良質なものだった。イギリスは周辺国に比べると有名な画家はそれほど排出していないが、優れた絵画を集めることには長けているようだ。ロンドン市内には大小多くの美術館があり、そのどれもが一流の絵画を有している。私は3件ほどしか回れなかったが、そのどれも満足度は非常に高かった。

## 生活

生活面で馴染めない点は多かった。まずよく見ると街が汚い。これはやはりいただけない。そして物価が高い。どうやらすべての買い物に20%の税金がかかるらしい。そして極め付けは飯が美味しくはない。「イギリスの飯は〜」と噂には聞いていたが、これは致命的な問題だ。衝撃的な不味さではないものの、順当に不味いといった印象だ。初日に店で食べた食事は、その辺の芝生を引っっこ抜いてきたかのようなサラダと、サンダルのような硬さの肉だった。イギリス人はこれに2000円も払うのかと思ったため、今後の夕食はスーパーのサンドウィッチにしようと思った。吉野家の偉大さを知る。学会のバンケットでは、バスに乗って大きなラグビー場へと入っていった。正当なラグビー場のグラウンドを踏みしめて期待感に高まりつつ部屋に入ると、学会の昼食より質素な夕食が支給されたのであった。恐るべし！。結局のところ、ウィナー、卵、パン、オレンジジュースといった恐らく世界共通規格のホテルの朝食が一番おいしいのだった。

ホテルは同じく中国人学生のイーシンさんと同部屋だった。彼はとても親切で、優秀だった。毎日彼と話したことは英会話のよい練習になった。彼は帰国日前日に大量のお土産を買い込んでいたが、その大半が友人や親戚に頼まれたものらしく、イギリス名物というよりは健康食品などよく分からないもの購入しており、お国柄を感じ取ることが出来た。

## 英語

学会中は常に、英語での受け答えが出来るというのが、まず最低限の技能として必要だ、と感じることが多かった。上述した様な、あまり質の良くない発表でも、質問の受け答えに関しては難なくこなしている発表者がいる一方、プレゼン自体は流暢でも質疑応答に移った瞬間から急に雲行きが怪しくなる発表者も見受けられ、もったいないという印象を受けた。自分も質疑応答は手も足も出なかった。他の学生セッションを見ていると、中国人の学生の多くは英語の受け答えが十分に出来ており、何が違うのだろうと思いルームメイトと話したが、明確な答えは出なかった。単純に学習量の違いなのだろうか。

学会以外に関しても、あまり不自由することなく、現地の方々やルームメイトと意思

疎通が出来たと感じる。今回の学会参加で唯一、成長したと言い張れる事柄なので少し自慢させてほしい。1月にアメリカ研修に参加したときは、言われた内容が多少分かっていても返答が英語で出てこないもどかしさを強く感じた。しかし、そこで見聞きした会話のテンポや言い回しなどが何となく吸収できていたのか、イギリスでは比較的すらすらと言いたいことを主張できるようになっていた。また、はじめは外国人にビビっていたが、分からないときは堂々と何度も聞き返すことが出来るようになった。個人的



地元のおじさん(中央)

にこれはかなり大きな一歩で、英会話自体のハードルが大きく下がり、さらに話しかけやすくなった。彼らの多くは根気よく丁寧に話し、聞いてくれた。少し図々しいくらいが丁度いいのかも。別の北大生とともに恐る恐るパブに入った時に、話しかけてきてくれたおじさんは、半分何を言っているか分からないが会話が成立していた。

## 帰国

フライトが21時過ぎのため、ルームメイトとの別れを惜しみつつ、だめ押しのロンドン観光を敢行した。ヒースロー空港では預け荷物の職員の適当さに若干の不安を覚えつつ出国手続きを終えた。空港内のYo! SUSHI!でサーモン巻きとサーモン握りを食べて搭乗した。サーモンは意外においしかった。搭乗してから離陸まで3時間の待機があり、そこから12時間のフライトだったためかなり地獄だった。バンコクでも行きと同様に美味しくないとスシを食べて新千歳に帰国した。ベルトコンベアから自分のキャリーケースが出てこないため、ロストバゲージの手続きをして帰宅した。荷物は後日無事見つかった。

## おわりに

ICONE26への参加を通して、自身の英会話能力のささやかな成長を感じるとともに、一方で英語での学会発表での自分の未熟さを強く認識することになった。また、論文執筆、発表準備では研究スケジュールの管理の難しさを身を持って体感した。英語でのコミュニケーションの機会、や国際学会での発表などの経験を経て、一部では自身の成長を感じることもあったが同時に課題も浮き彫りになる実りある一週間だった。